

第廿七回

左母二郎夜新人を罽奪す
寂寞道人見に圓塚に火定す

網乾左母二郎はその夜さり、神宮の夜風に冒されけん、詰旦より寒熱せしかば、この日は手習子等をはやくかへしつ、夕飯もたつへすうち臥たり。かくて又その次の日の、午の貝吹く比及に、心地清々しくなりければ、ひとり臥筆を奔めつゝ、まづはや口を漱んとて、外面に立出れば、莊官屋敷のかたに當りて、物の響の聞えたる、年の終りに煤掃く如し。いと不審く思ふになん、躬て門邊を立はなれて、間近く聞んとする程に、と見れば一個の莊客、右手に一挺の整を携、左手に五六根の夏羅葡を引提て、草野のかたより來るありけり。是則別人ならず、暮六が老僕背介なり。思はずこなたを見かへりて、目礼をしてければ、左母二郎はこやくと、手を抗て呼とめ、「先生などていそがはしき。けふは土用の虫拂坂。常にはあらで物々しき、帚響の聞えたる、彼はいかに」と尋れば、背介は呼れてほとりに立より、「否、虫乾には候はず。今宵増入の候へば、天井なる蜘蛛を搔拂ひ、席薦の塵埃を打發し、戸棧の修復、障子の張更、毛見の儲にいやまして、目つらを廻むいそがはしき。加以庖厨の混雜。これ嚮せ、この羅葡は、膽の料に引もて來つ。月來の懇切甲斐に、資に來ませ」とうち笑へば、左母二郎驚きて、「莊官の増とのは、彼大塚信乃にあらずや。彼人はきのふの朝、啓行す、と聞たるに、原来首途の日を延して、俄頃婚姻せらるゝ歎」と問せも果す、「違へり違へり。信乃とのは昨日の曉方、下総へとて赴き給ひき。今宵來まする増殿は、大塚ぬしには候はず」と半えきかず左母二郎は、忽地に顔色変じて、「その増がねは何人ぞ。素より約束ありて歎」と言葉せわしく問究れば、背介は整を杖つきて、「現理り、膽の漬るゝ話説也。僕も定かにしらねど、増殿は陣代の簸上ぬしにをはします。又媒約は属役なる、軍木殿にて候はん。聘礼物の件々も、いつの程にか贈られけん。書院に飾立てあり。且密々の婚姻なれば、今宵亥の比及に、増殿がみつから來まして、新人御寮を伴ひ給ふ、と人の噂に聞えたり。氣の毒なるは大塚ぬし、底意地わるき伯母御夫婦の、機嫌をとること八九年、要緊の時には追遣られて、彼初物を他人の鯉、七十五日生延かねし、口果報のなき事よ。表液吸ふべきわれにもあらねど、傍痛き限りなるに、彼人後に聞給はゞ、腹も立ん、口舌も

發らん。頂の脂ならねども、襟に著ねば當世ならず。さても無益の長物かたりに、時を移して叱られん。晩に來ませ」と整柄を、再び肩にうち掛けて、背戸をさしてぞ走去ける。

左母二郎は氣色だつ、胸を鎮めてさりげなく、応をしても氣はずまぬ、細輪の田井に立よりて、汲揚る水も湯と沸ん、心の燄とゞめかねし、手桶引提てそがまんに、内に入る吸、出る吸、憤激嗟嘆に堪ざれば、何せんすべも手につかで、つくくと思ふやう、濱路は信乃に稚きより、いひ各つけたることありと坎聞けば、渠に今、妻せられなは是非もなし。それすら曩に龜篠が、われにいひつることもあり。然るを何ぞや陣代の、勢ひに附て約束を更改し、既に密事を委ねたる、われをば顧ざりけん。おもふにいぬる日龜篠が、云云といひつるは、全く濱路を囮にして、われに彼一刀を、搦かえさせん為のみなりき、この返報には今宵亦、壇の簸上が來つるとき、その席上へ踏込て、臺六夫婦が悪事を顕し、思ひのまゝに恥かゞやかして、婚姻の妨せん。否如此してはわれも亦、件の刀を搦かえたる、支黨の咎脱れかたし。加旃信乃が刀は、竊に藏めてわが手にあり。この事遂に露顯せば、ひとりわが罪重かるべし。この計策、究て可らず。又唯刀の事を隠して、母親が許したる、濱路が事をのみいふとも、正しき證據絶てなし。よしや争ひ訟るとも、その訟を定めんに、陣代ならで誰にかよるべき。かゝればわれに理ありとも、勞して功なきのみならず、簸上は必われを忌ん。忌は必理を非に枉て、獄舎にも繋くべく、獄舎に入らば、責殺せらんとし。この計策、いよゝ拙し。彼老婆奴がこゝを見越して、密事を委ねた為のみ、濱路を妻せんとはいへり。斯飽までに賺されしは、わが智の足らざるに似たれども、その夜ざりこの刀の、奇特を見たれば直は融さず、臺六奴にはわが刀を、授たれば損はなし。けふまで何ともいはざれば、彼奴等はわが刀を、信乃が刃ならんと思ひて、十襲秘藏するにこそ。これのみ快愉れども、われも亦男子也。月こる日こるおもひをかよはし、且偽りにもせよそが母親の、云云とまでいひし濱路を、今更人に娶られては、里の批評も面ふせて、ながくこの地に住ひかたし。所詮今宵、宮六等が來るを窺ひ、婚姻の席に血を沃きて、あるじ親子壻さへに、一座の双原塵にして、直に他郷へ走るべし。否々これも拙策ならん。彼奴等は勇勢なり。志を得遂すして、搦捕らるゝ事あらば、後悔其処にたちかたし。早りて危き事をせんより、竊に濱路を搦獲ひて、逐電するにますことなし。曩に濱路が強顔かりしは、信乃が眼前にをればならん。今は信乃を遠驅られつ、彼醜郎に妻せしむるゝを、歡ことと思ふべからず。われに得心せずもあれ、伴ふてその故郷を去らば、何でふ従ひおのゝことあらん。もしなほ信乃に操を過して、われを咎れずは京にまれ、鎌倉にまれ遊女に售て、金にせんもいと易かり。又この一刀の奇特をおもふに、持氏朝臣の重器と聞えし、村雨丸に極れ

り。これを故主扇谷殿に献らば、帰参のよすがなるべけれど、出処を問ふことあらば、護影き所あり。又成氏朝臣に進らせなば、信乃が為に訴はるべし。所詮華洛へ携上りて、室町將軍に献らば、召出されん事疑ひなし。これ十全の計策、只この一議にとどめたり。呼しかなり、とわれに問ひ、われに答へて濁江の、底いとふかく尋思しつ、稍十二分に計得て、心中竊に歡び、独居の事にしあれば、人なみなる調度はなけれど、俄頃^にに要用の事ありとて、些の家具衣裳を沽却して、これを路費としつ、しのび〜に集めおく、笠に脚絆に草鞋の、外に物なき行装ひは、整ふに似てまだ足らぬ、この甲夜闇の進退は、背門より入りて彼未通女を、としてや誘引出すべき、斯して奪ひ去るべき故、と尋思に果しなつ日の、まだ暮すや、とうち仰ぐ、天に往方の定めなき、浮る雲の不義好悪、伎倆に暇なかりけり。

さる程に、濱路は既に必死の覚期を、氣色には顕さず、假染ながら病著と、炎暑にいと々鬚髪、なからん後まで恥しき、姿をばやは見らるゝと勉て髪を結つゝも、いまだ臥房を出され共、一親はこの形勢に、今宵の婚姻推辞はせじ、と思ひにければ心放しつ。黄昏時はいとしく、いそがはしさに紛れて得見す。かくてその日は暮果て、初更近づく甲夜暗に、濱路は臥房を脱出て、潜ぶ納戸の縁頼傳ひ、外面へは出かたく、背門にも人の出入繋かり。われや何処を死処、とおもひかねつゝ土庫の、間の籬笆に身をよせて、遠り出れば生憎に、顔にかゝれる蜘蛛は、女靴を包む吉野紙、對喪る風情なり。こゝは納戸の背庭にて、類たる假山あり、夏樹の繁枝、菱も拂はず、人のかよはぬ処なるに、如法闇夜の事なれば、こゝ究竟の処でと死天の首途を急ぐなる。されば臥房を出るときに、燈火を暗して、蝸の内には臥たる如く、枕に小襦をうち被たり。しられぬ隙に、と携たる、用意の織帶引伸して、築牆のほとりなる、松が枝に投かけて、はや經れんとする物から、心の闇に天の烏夜、降れる帯の端なくも、搔撥る手頭によるべなき、わが身いかなる悪報にて、実の親も同胞も、ありとは聞けど名をしらす、よに親ならぬ親達に、養育の恩、年夥、稟ておくらぬ不孝の罪、それ思はぬにはあらねども、一庭踏ぬ女子の節操、教の文に背んや。さるにてても心つよきは養親達、誓を破る不義の富、榮利を樂ひ給ふとも、人の命は限りあり、惜きは身後の名にあらすや。そは恨むともなまよみの、甲斐なきは現女子なり。こゝと彼処は遠くもあらぬ、道の程とは聞ながら、天を隔て飛鳥の、翔なき身をいかにせん。よしや俱寐はせずもあれ、一トたび親の許されし、妹伏の契あり磯海、ふかき歎きに身を措かねて、今を限りの命ぞ、としらせねばこそしられませじ。斯なるならばいぬる夜に、いふべき事のなほあるを、いはで別れし鶏の音を、恨しより猶強顔きは、今撞初更の鐘の聲、亥中の天をまたで逝く、われや真如の影頼む、月夜鳥に啼れなん。君が一宵の言の葉に、露の命を惜

あへず、墓はかなくならん夢ゆめの迹あと、傳つたへも聞きかば立たちかへり、操みさねはかえぬこの松まつを、妻つまの標石しるしと鬻みそし、君きみが手
つから阿伽灌頂あかくわんかんじょう、贈贖たむけの水みづの一露ひとしづく、受うけなばこれぞ不二説法ふじせつぼう、たとき聖ひじりの讀經どきぎやうにも、まして成佛ぼつぽうし侍はべらん。
今般いまはに物ものをおもはじ、と思へどもおもふ良人まの事こと、親同胞おやたらからの事ことさへに、心こゝろにかゝる歎なげきのかず、潜しのぶ
とすれどしのびかねて、ひとりごちたる竊音しのびねに、しのび涙なみだの露深つゆいけて、袖そでから濡ぬる、夏草なつくさも、秋あきのゆふべと
戦そよぐめり。

さる程ほどに左母さま二郎じろうは、時刻じこくを測はかりて墓六むまが、背門せいもんより潜入しのびいらんとするに、彼処かしこも挑灯ちやうちんひまきげ引提ひきて、出いづる人ひとあ
り、入いる人ひとあり、便たよりわろし、と立退たすのきつ。なほ外面とのかたを彼此あちこちと、密々しひひくにつち遶めぐりて、母屋おもやの背後うしろに立た在すつ、つ
ら、透すかしながむれば、築牆つじかきの朽くちたるならん、そが根良ねらに、犬いぬの出入いでいするばかりなる、類ぐつさへありしかば、
是究竟こたくつせうと竊ひそかに歎なげび、やをら細溝こみそを反越はなこえて、その類ぐつより跣入はひいるに、朽くちたる牆かきの癩けなれば、わが入いる隨まに廣
かりつ。樹粒こたちの下もとに身みを起おこして、手足てあしの壤つちを拊落なでおとし、家内かないの様子やうすを考かんがへ、いと暗くらければ其処そことも得別えわか
ず、只左邊ただいせんなる白壁しろかきのみ、鳥夜やみにもほのかに見えしかば、原来さてはこゝは納戸なんどの背後うしろなり。彼土庫あのありこめの間まを遠めぐれ
ば、常つねに濱路はまぢがをるといふ、小房こむらへ遠とほからず。そこらの案内あなはよくしらねど、しのぶに難かたきことやあ
る、と思ふばかりを心こゝろあてて、樹粒こたちを傳つたひ、樹下こしたを潜くぐりて、稍假山やうげさんのほとりに到いたれば、前面むかひに女子をなごの泣音なくこゑ
す。うち驚おどきて透すかし見みつ、つゝいるて聞きくに濱路はまぢなり。天てんの與あと歎なげびて、仇はたたは近ちかつかず。啣くちつを聞きて思
ふやう、原来さては濱路はまぢは今宵こゝろ來くる、簾上ひかみ宮六みやろくをいたく嫌きらひて、經くれんとするにやあらん。渠かれが節操せつさか、われ
なるべきか。定ただかに聞きわきかたけれども、大おほかたはわれなるべし。そは誰たれにもあれ、掌たのに、落おつる真玉またまを碎くだ
んや。さはとて足を翹あしして、搔撈かきよれば折をりよし、濱路はまぢはやうやく松枝まつがえに、掛かけたる帶おびの端はしに携すがりて、又また泫然あめめと
うち泣なたる。涙なみだの隙ひまに念仏ねんぶつを、十遍じゅうへんばかり唱なつ、經死くへいんとする程ほどに、声こゑをまかけず後方あひうしろより、拘禁こくげんめて
引戻ひきもどせば、吐嗟あなげと叫こゑぶ口に手てを掩おほひ、驚おどき給たまふな。左母さまなり左母さま也。思おもひかけなき今宵こゝろの婚姻こんいん、死しなんと思
ひ決め給たまひし、心操こゝろをわが身みにとれば、いと尊たかく忝かたじけな。親達おやたらのむじんなる、われさへ腹はらにすえかねて、
いかでおん身を將いて走はしらん、と思ふ誠まことの空そらしからで、いひ合あひさねどこゝへ來きて、必死ひつじを救すくふは天縁てんえんならん、
歎なげくことかは「と慰なぐさむるを、耳みみにはかけず身を揉もみ、やうやくに振放ふるなち、「噫あな無礼なめなる白徒しれひとかな。他夫あまたしに伴とも
る、わらはなりせばいかにして、臥房ふしどを出いでてかきさひの、命いのちをこゝにやはすつべき。無益むちやくの事をいはん
より、其処そこ遁のがれずや」と敦圍とんゐて、復織帶ふくぢぢに手てを掛かく、遮禁あはせめて冷笑れいせうひ、「然聞さやてはなほ死しさず。月つきこゝろ
日ひこゝろ思おもひを運いはして、又母親またははが云いふと、竊ひそかに許ゆるせし事ことあれば、簾上ひかみを嫌きらふはわが為ために、苦節くるせつを竭つくす、と思
ひして、ゆきては還かへるやかへらずや、未おぼつかなき信乃しんのが事こと、思おもひ絶たすはその身の破滅やめつ。否いなでも応おひでも

携ていぬ。とく／＼出よ」と手を拿れば、又ふり拂ふ玉柳の、風に紊るゝ翠の鬢、共にはふるゝ鬼鷲の、
贅縁の松を盾にして、彼首へ逃れ、此首へ潜り、烏夜に紛れて躲れん、と思ふのみなる猫場の雉子、雄に
わかれて叢蔭に、声も得揚す、宿樓にも、かへり入られぬ憚の、内外に逼る呵責の苦しみ、追れて礮と
泣沈めば、鈍しや、と襟上を、搔厠み引立て、手拭銜する猿鑢、小腕に楚と搔込だる。濱路はかほそき
病後の瘦宍、木兔に捉らるゝ夜の蟬、声だになくて哀れなり。左母二郎は既に斯、女子を小腕に抱きては、
舊の鞆より出られず。切何処より脱去らん、と見かへる片類に織帯の、障るを左手に丁と撥り、是究竟と
からまへて、閃りと登る老松の、枝より傳ふ築牆を、辛して乗踰つ、はや外面へをり立て、跨ぐが如くう
ち渡す、溝に音を絶つ蟻蟻の、屨一隻も失はず、豫て用意の行鞋、足に信して將て去ぬ。

かゝりし程に庖厨には、式の土器、饗膳の、調理庖丁整ふたり。當下幕六は、書院の床間に、笛花を
立、懸幅を、掛わたしなどするに、初更の鐘の音すなり。時刻近づきぬ、と思ふにぞ、龜篠を召ていふや
う、「増殿の來まするに、今一時が程はあらじ。夏の夜の深やすきに、いつまでかいはで止べき。濱路に
云と聞えしらして、衣裳を著させ給はずや」といへば龜篠點頭て、「吾儕も如此思ひ侍り。よろづに暇
なかりしかば、暮ては臥房に立よらねども、湯漬を些したうべし、と婢們はいひ侍り。髪さへ結び揚たれ
ば、衣がえさするは易かるべし。あないそがしや」といひかけて、そが臥房へ赴きつ。いく程もなく走り
来て、「事あり事あり」と呼立れば、幕六驚き見かへりて、「こは謀々し何事やらん」と問せもあへず眼を睜
り、「幸なし幸なし、落つき給ふな。濱路は蛸を脱出て、何地ゆきけん影もせず。もし廁へや登けん、と思
へば浴室の四隅まで、隈なくあさり侍りしかど、をらねば逐電せしならん」と告れば幕六おもはずも、拿
たる花瓶をつち落し、流るゝ水を袴の裾もて、拭ひも果す身を起し、「そははや大事に及びたり。然とても
騒ぐべからず。いで／＼」といひかけて、紙燭を秉て庭に出れば、龜篠も共倍に、樹柱の隙を彼此と、求
めかねつゝ土庫の、間を過りて奥まりたる、背庭に來て見れば、こゝより出たりとおぼしくて、織帯を松
に結降、足代にせしにやあらん、牆を乗たる足の泥、処々に印たり。

もしやと思ふ憑の綱のきれて澳邊に漂ふ舢の、跡なきが如幕六は、顔色水より蒼なりて、忙然たる形容
に、龜篠も亦嘆息し、「結髪したるに忤れて、暮ても護らざりしかば、線子箆の篋を飛したり。おもふに
濱路は豫てより、いひあはせし事ありて、信乃奴が誘引出せしならん」といへば幕六沈吟じ、「信乃には
年来睦しからぬ、額藏が従ふたり。縦ざる情由ありとても、暫く途より引かへして、何事をかせらるべき。
心憎きは左母二奴なり。とく來給へ」と先にたちて、舊の処に走入り、心利たる小廝を召て、「左母二郎は

宿所にありや。挑灯引提て、よく見て来よ、いそげ〜」と焦燥は、「うけ給はりつ」と応もあへず、飛がごとくに走りつ。且して件の小廝は、喘々走かへり、「左母二ぬしの宿所へいゆきて、呼門に応せず、戸を推開て見候へば、ぬしはなむら也、調度などとはひとつもあらで空房にひとし。その為体をもて推せば、逐電しつるに疑ひなし」と告るを聞いていとしく、夫婦は遺恨に堪ずして、俄頃に僕僮們を召聚、「云云の事こそあれ、その密夫は左母二奴なり。遠くはゆかじ、とおぼゆるに、疾追蒐て引搦来よ。もし汝等が手に乗らずとも、濱路をな捉逃しそ。灯をもたばなかくに、這奴にしられて捕かたけん。人を追ふには闇こそよけれ。背介は老て足よはくとも、今宵ばかりは氣を入れよ。誰にもあれ功によりて、賞錢は過分にとらせんす。誰と誰とは東のかた、彼と彼とは西のかた、必ぬかるな、とく〜」と両三人を一隊にて、既に四方へ部しつ、瞬間に悉く、出し遣てもとにかくに、夫婦が心休らはす。龜篠は頭痛を病して、みづから推摩む額を擡、「斯なるべしとは思ひもかけず、曩には信乃を禁んとて、左母二郎を引入れにき。さばれ濱路は一トすぢにて、外へこゝろを移さず、と猜し錯へて兪児の、隙護ざりしはこなたの怠り、悔しき事をしてけり」と人をも身をも怨ずれば、幕六も亦嗟嘆して、「過にし事は悔てもかへらす。まづさし當る今宵の婚姻、はや婿入に程もなし。その折濱路を將て來すは、何とかいはん」と屈託の、頭を偏に病しけり。

浩処に土太郎は、曩に幕六に相譚れ、神宮河にて人しれず、信乃を亡はんとしつれども、その水煉に敵しかたくて、謀合期せず、勞せしのみにて功なければ、幕六これを不足にして、辛苦錢も多きは取らせず。かくて土太郎は、昨夕の樽浦に幸あらで、鐵鈔一文もなきまゝに、素より不敵の癖者なれば、彼莊官を豪求て、些の酒價を得ばやと思ひて、夕涼かけて訪ひ兒に、背門より入れば、幕六は、とく見て忽地こゝろに歡び、「土太郎款。よき折に、よくこそ來つれ」と立迎れば、「否、さはよくも候はず。いぬる夜の辛苦錢、相場外で直もあらず、切て些は増酒價を」といふを禁めて、「是はさて、そを今更にいふ事故。又更めて汝を憑ん。今宵は不慮の難義あり、その故は箇様々」と辞せわしく諷示し、「わが女兒を將て走りし、密夫は汝も認めり。神宮河にて同船しつる、網乾左母二郎といふもの也。鬮毛の老弱遺なく、既に追捕を蒐たれども、彼等のみでは心もとなし。今招かすして汝が如き、資を得たるはこよなき幸ひ、かくてはわが運なほ憑もし。とく追禁て引搦來は、辛苦錢は多少を論せず。偏に憑む」と夫婦して、拜ぬばかりに相譚へば、土太郎聞てうち點頭、「現今こゝへ來つる途にて、豫て相識る行轡夫、加太郎井太郎等が、行客を乗せつゝも、足を論じて鬮々、とそがまゝ昇も擲ざりき。烏夜なれば、そをよくも見ず。只、

井太郎等にもものいひかけて、立休はで通りしが、原来件の行客は、左母二郎に疑ひなし。轎子に乗りしは、娘さまならん。途は正しく礪川、本郷坂へ赴きけん。いで追禁ん」と裙とり揚て、出んとすれば、臺六は、遽しく呼かへしく、左母二郎は武士の浪人、その本事測かたきに、素手にて追はゞ怒あらん。これもてゆきね」と挿替の二刀をとつ出つゝ、通写を奪て臂に跨、「これではいよいよ心つよし。翩に搔籠み瞬間に、雌雄を將てかへらん。酒暖めてまち給へ」と急ぐ夫婦を見もかへらず、なほ甲夜間に稻妻の、滅るが如く走去けり。

話分両頭、寂寞道人肩柳といふ、怪有の行者ありけり。原是何國の人民なるをしらず。去歳の夏より、陸奥出羽を券縁し、今茲は下野及下総に赴きつゝ、遂に武威に飛錫して、愚民に尊信せられたり。その修法、嘗薪を積て烈火を踏むに、自若として手足焼爛るゝことなし。これによりて、人の吉凶悔吝を占ひ、又病厄を祈禱するに、応驗ありといふ。年来吉野、葛城、三熊野はさらなり、駿河の不二、肥後の阿蘇山、薩摩の霧降、下野の二荒山、出羽の羽黒山など、靈山名勝を、いく遍となく登陟し、神人異物に邂逅して、

【挿絵】「寂寞を示して寂寞火坑に自焼す」「寂寞道人肩柳」

不老の術を得たりとなん。現その為体、烏髮長髯にして、なほ壯年の人と異ならず。しかれども、百年前の事迹を問ふに、応答眼前に見たるがごとく、説きさゞることのなければ、人竊敬信服せり。又この肩柳は、左の肩尖に一塊の瘤ありけり。これによりて、その形體斜なり。人亦その事を問はば、肩柳答て、「わが一身には、常に佛菩薩宿らせ給へり。左は是天行の順路、肩は肢體の無上所也。よりて東方天照皇太神、西方釈迦牟尼佛、こゝに止宿しをします」といへり。かくてこの夏月、肩柳は、豊嶋郡に鳴錫して、愚民等に示すやう、「夫三界は火宅也。穢土に立て、穢土をしらず、嗜慾に耽りて、嗜慾を思はず。愛惜によりて輪廻あり、好悪によりて煩惱多かり。四大原は何処より欵來たる。以れば悉皆空なり。十悪何処よりか到る。省れば一妄想のみ。この故に、諸佛惡趣に出現して、濟度に暇なしといへ共凡夫は無邊無數也。佛縁なきものは、無佛世界に生じ、佛性なきものは、畜生道中に墮。縁度普からざるが為に、世尊涅槃の室に入りて、寂滅為樂と教給へり。現生あるものは、必死あり。形あるもの、滅せざるなし。機圖既に満るときは、太陽の没る如く、積氷の消る如し。誰か一人のとゞまるものあらんや。かくればはやく一身を天堂にかへし納めて、彼岸の禪定門に入るこそよけれ。よりて來ぬる六月十九日、申の下剋、日没の時に丁りて、將に火定に入らんとす。その地は豊嶋本郷のほとり、圓塚山の麓なるべし。

深信有縁の道俗は、おの／＼一束の柴を布施して、來會せよ」とぞ御たりける。さらぬだに、尊信したる里人等は、これを聞て讚嘆し、「昔より入定の行人ありとは聞けど、皆生ながら土中に入るのみ。火定は最も有かたかるべし。權者の入滅をおがまずは、何の時をか期すべき」とて、卒日を俟ざるものもなし。かくて衆人は、肩柳が指揮に隨ひ、六月望の比よりして、圓塚山の麓なる、茅葺を交拂ひて、一座の土壇を築立るに、黒木をもて柱とす。壇下には、廣く穴を穿たる、その廣さ五六間、深きこと、丈餘にも及るに、柴影投入たれば、虫の跋へき隙もなし。抑この圓塚山は、豊嶋卒郷の西にあり。巽は蒼海杳渺として、安房上総の盡処をも觀るべく、西は連山嵯峨として、管根、足柄、富士の雪、夏なほ寒きこゝちぞす。鎌倉海道ならざれども、木曾路へかよふ順路にして、上総下総へ赴くもの、こゝを過るを捷徑とす。さる程に、はや卒日にもなりしかば、寂寞道人肩柳は、白布をもて頭を包み、おなじ布の淨衣を被て、壇の中央なる胡床に尻をかけ、手には一箇の金鈴を振鳴らし、胸には一面の明鏡を掛、背には一條の輪袈裟を垂て、わざと兜巾を載ざりけり。その打扮異様にして、觀念の眼を閉たる、甚麼なる經を讀にやあらん、朝より暮るゝまで、その音声濁らず洩れず。をり／＼に人を視る、眼光いと凄し。壇下には彼此の老弱男女、群參圍繞して、蘿蔔山田の邊まで、人ならぬ処もなきに、頭の上を照したる、夏の日の堪かたくて、「われはや火定に入りనికి」と罵ながら樹下を、索て聚ふも尋かりけり。かくてはや、黄昏ちかくなりしかば、豫てこゝろを得たるもの、件の柴に火を放てば、煽々として燃揚る、暑中の猛火におそれ惑ひて、壇のほとりにあるものは、散動立て退きけり。當下肩柳は、經よみ果て、平形金珠を、鎗々と推搦つ、曇時念じて壇下を直下し、声高やかに講していはく、「昔如来の従兄弟なる、阿難陀の、摩揭陀國をたち去て、吠舍釐城に赴き給ふや、その王おの／＼徳を恋ふて、迭代に哀驪し、その二王はこれを追ふて、南岸に營軍して、その二王はこれを迎て、南岸に來候せり。阿難尊者、一王の相争て、鬪野殺害せんことをおそれたまひ、船より虚空に昇つゝ、立地に寂を示して、身の中より火を出し、骸を焚て中より折き、一ッは南岸に墮して、一ッは北岸に墮して、その鬪争を禁め給ひき。その功德廣大なり。この他の道徳自燒して、或は三世の諸仏に敵り、或は衆生済度の方便、載て聖經に灼然也。貧道辱く、三室に事り、勤行に年を歴れども、自他の利益に普からず。爰に愚癡の薄徳を省れは、速臭骸を解脱して、無垢の淨土に到んと欲す。冀は有縁の道俗、身滅不隨者の財宝を棄捨して、未來永劫の善根を殖よ。設夫一錢二錢を捨るものは、一劫二尊の慈航に乗らん。三錢四錢を捨るものは、三藏を自得して、四難もこゝに易かるべし。五錢六錢を捨るものは、方に五覺に感通して、六塵を掃除せん。七錢八錢を捨るものは、七難八苦を出離し

て、頓生菩提の機圓にあはん。九銭十銭を捨るものは、九品の淨殺に托生して、十界能化の菩薩とならん。如是の善男女、如是の財を捨れば、身はなほ苦海に在りといふとも、則、員寂の同行たり。いかにとなれば、五慾の財物を焼却て、もてその身に代、無量の徳卒を播殖て、もて清果生ればなり。勸化隨縁、愆ずは、平等利益疑ひなし」と説勸る声の中より、群集の老弱、火坑を望て、破落哩々々と擲つ銭は、落花の風に隨ふ如く、雪吹の窓を拂ふに似て、幾十百といふをしらす。その銭既に投了れば、肩柳自葬の引導して、声高やかに、偈を説て云、

西方に釋尊を葬し年、擊然として石火を發興す、東土に道昭を焼し時、

閃々として炬燵揚播す、言に靜に十眼を相睜て、灰裡に清果を結ぶを看よ。

唸誦すること三遍にして、煽々たる猛火の中へ、身を跳らせて投入れば、火發發と立沖り、膏沸き、六焦れ、骨もとどめず、忽に、灰燼となりて失にけり。これを見る衆人は、感涙を禁めあへず。同音に念佛して、且く鳴も止ざりけり。

かくてはや山寺の、入相の鐘音する、諸行無常の觀念も、僉今さらの事におぼえて、おのがまに〜 歸去、人東西に立わかれ、南北に散つせて、迹には燃る茶毘の坑、許彦光のみ夏虫の、火虫の外に物もなし。さる程に初夜過て、月ならなくに小挑灯、行轡の傍の窓に、結提つゝ引添て、歩いそがして來るものあり。此は是別人ならず、則、網乾左母二郎なり。嚮に濱路を豪奪て、途に行轡を備ひつゝ、そがまゝ問道を乱走して、木曾路を京へ入らんとて、路さへ曲る由美村より、この圓塚を過るになん。そを昇く二人の轡夫は、なほ滅残る火定の火光を、よるべに間近く打すえて、左母二郎にうち對ひ、「親かた、定めめの繼場也、足賜て返りてん。取らせ給へ」と左右より、さし出す掌を、見かへりて冷笑ひ、「汝等はいかにして、啣せぬ酒に酔たるやらん。駒込の建場をうち越て、板橋までと定めたるに、こゝにて繼ぐといふよしあらんや。いと肯れぬことなれども、さばかり骨を惜むとならば、汝等を憑むまじけれ。轡なるをんなを扶出して、これもてゆきね」と轡中より、両三の銭とり出して、通与すを受す、両人齊に、足踏鳴らしてうち笑ひ、「纒に二百三百の、竹銭を取らんとて、夜行をはる〜こゝへは來す。いと艶妖なる臍物を、縛からけて猿轡、狂女な〜と偽りても、いひ暗めても挑灯の、火光で疾視し眼は違はず、その両方は人目ばかり、武士に打扮拵見、己ひとりに好事さして、空棒振てやは還る。息杖一杵、酒一盃、建場で齒の利く板橋の、橋を省きし板の井太郎、その相肩の加太郎、と人にしられし蜘蛛冥利、拵了に由断なつの夜の、網に掛たる玉虫を、なでふ他手に落すべき。をんなはさらなり、腰なる盤纏も、衣くるみ脱で亡なれ」

と訛声高く左右より、哮りかゝれど些も騒がず、「ほざいたり藪蚊們、耳邊に附く物ニ奪、欲くはこの世の暇から、いで取らせん」と拔打に、晃りと被せる刃の雷光、右邊に立たる加太郎は、肩を砍られて仰反たり。透をあらせず井太郎が、打込む息杖受ながして、「二三合戦ふ程に、加太郎も亦身を起して、左右より引夾み、野火を燭に追つかへしつ、送に叫ぶちから声、井太郎等は血氣に乗して、只管に競へども、撃剣槍棒、拳法などは、一点ばかりもしらざれば、動

【挿絵】「山前の黑夜四凶挑戦す」「井太郎」「はま路」「左母二郎」「加太郎」「土太郎」
すれば駭惱されて、手痕に乱打に、足場えらまで夏草を、秋の紅葉と染なせり。

されば亦左母二郎は、武藝の達人ならざれども、拿たる刃は名にしおふ、村雨の宝刀なれば、打振る毎に水氣たちて、八方に散乱し茅萱に移りし火は滅つ、茶毘の光も衰て、足下暗くなるものから、鐵を断石を劈く、刃の奇特掲焉、怯めば憑入る後袈裟に、加太郎は復肩を割られて、鮮血に塗れて仆れたり。その隙に井太郎は、二きながら後方より、組むを閃りと振放ち、足を飛して撲地と蹴る。蹴られて挫と轉輾び、起んとするを、起しもたてず、細頸丁と打落して、血刀引提て吻く折、土太郎は稍追蒐來つ、滅残る火に透し見て、声をもかけず背より、晃かす刃の光に、左母二郎は眼はやく、吐嗟とはかり身を反れば、置かけて撃大刀を、拂返つゝ信と睨へ、「賊は二人と思ひしに、原来汝も支黨の、引剥にこそ」といはせもあへず、刃を閃りと拿直し、「いぬる夜、神宮の漁舟で、面を認りし瘦浪人、戸田河條で名の賣れたる、土田の土太郎を忘れし奴。吾を引剥と罵るは、豕を抱きて臭きをしらざる、汝がうへをいふに似たり。頭顱なき兪児に、ながしき論は益なし。莊官殿に頼れて、はぶらかされし臍物を、とり復さん為に來つ。諺にいふ大蛇の道は、蟻が識たる夏山里、甲夜に圖らず物いひかけし、この雲介等は樽蒲藪計。その折警と見かけたる、しかも怪しき行客を、乗せて間道を走りしならん」と思ひ、憶はず圓塚の、茶毘より先に露と消たる、井加岡太郎が為には仇人。女の子を拐撃ひし大罪人は、捕采ある縲綽、脱れぬ処と覚期して、みつから肘を背へ廻せ。然らずはこゝで首級にして、田畑の西瓜と欺くまでに、莊官殿へ裏にせん。さでも走る奴、争ふ奴」と罵迫たる面魂、前の二人にいやませども、こなたも大膽不敵の癖者、刃を揚てよせ立す。「あな嗚呼がましき追捕呼り、櫓槓一本、板三枚、下は地獄の境界も、波上には人を罵らん。いまだわがこの本事を見すや。女子を將たる夜行と侮り、引剥をせんと計較し、二賊は既にかくの如し。汝も冥土の伴侶に、三途の川舟乗んとならば、刃を受よ」と閃めかす、尖き大刀風、物ともせず、「死物狂ひの糸せ廣言、息の根轆ん」と撃あふ鏗首、劔に響て凄しく、夜の夏山、人絶て、虫さへ声をとどめたる、草

を蹴ひらく奮撃突戦、一上二下と術を竭す、雌雄はいまだ判ざりけり。しかはあれども左母二郎は、再度の苦戦に稍疲労れて、既に浅痕を膺しかば、敵しかたしと思ふになん、こころに「計を生しつゝ、刃を引て逃走れば、土太郎いよ、勝に乗て、「蓬しかへせ」と追ふ程に、左母二郎は間を揣りて、手はやく小石を搔掴み、身を振りかへして礮と撲つ、飛礮は空を怒す、勢ひ猛たる土太郎は、忽地額を撲破られて、さと潰る鮮血と共に、「一声苦と叫びあへず、仰ぎまに仆れしかば、左母二郎は楯を突く如く、走りかへりて、そが胸前を、蹂躪、又踏居て、刺す刀尖は名詮自性、土に縫れし土太郎は、纒に手足を動かすのみ、身を大の字にひらかして、そがまゝ息は絶てけり。

抑この土太郎、加太郎、井太郎等は、豊嶋の三太郎と呼ばれたる、水陸の悪棍なり。年来しばしば人を書ひ、又しばしば物を掠て、娼酒賭突の場に遊び、上は國法をおそれず、下は縣吏を屑とせず。銭あるときは、鄧通が鼎をつらねて、食へども飽りとせず、銭なきときは、喪家の狗のごとく、餓たれども恥とせず、世に三兇とて忌憚られし、天罰こゝに疎からず、又唯奸悪邪淫の癖者、網乾左母二郎に殺されしは、毒をもて毒を制する、天の配劑玄妙ならずや。

間話休憩、左母二郎は辛くして、土太郎を撃果しつゝ、刃の鮮血を推拭ふに、生血をは引かて、白露に濡たり。こゝにますゝこの刀の、奇特に感嘆浅からず、「嚮には生死存亡の際に立て心えつかず、現わが衣の湿りしも、野火の滅しも村雨の刃より成す霽なりき。再び見つる刀の威徳は、仕官の梯、忝し」とつち躑きて鞋に納め、三尺帯を引裂て、腕の浅痕を括巾、滅果んとせし坑の火に、残れる柴を投入るれば、又烈々と燃上りて、風のまに、彼此なる、茅薈に移ればいとどしく、白昼の如く明かりける。

かくて左母二郎は、轡の内に伏沈む、濱路をちやら扶出して、その縛を釋捨れば、又潏然と泣沈む。傍の株に尻をかけ、「やよ濱路」とてもかくても腐縁、泣とて後へ、やはかへす。命を的の由美村より、この山越に三人の大敵、やうやく殲せしを、そは誰が為と思ひ給ふ。皆はおん身ゆゑならずや。畢竟浅痕を膺ふたるのみにて、恙なければこそよけれ、われ死なばおん身も亦、八しほにまして辛苦受ん。かくまで思ふわれをなぞ、強顔はもてなし給ふ。さらばおん身が心やりて、親達の密議を告ぐ。いぬる夜、神宮河の漁獵は、竊に信乃を書せんとて、誘引出せしものなるべし。かくれば羣三仕官が、不覺に水に落たるも、実は信乃を誑引入れて、水中に殺さん為のみ、然ども信乃は水煉を、よくするものにやありつらん。土太郎さへに敵し得ず、仕官は阿容々々と、渠に抱き縮められ、前面の岸に登されたれば、その謀成らざるならん。その前のおん身の母御が、竊に吾儕の宿所を訪ふて、信乃を許我へ起行する、意中の機密を

物かたり、『初里人等に媒妁せられて、信乃に濱路を妻せん、といひなつけたるときに、莊官殿が秘蔵の一ト刀、それを婿牽出に取らせたり。今にして明々地に、返せといはゞ、必推辞ん。よて如此々に謀るべし。その折おん身は船中にて、信乃が件の一ト刀を莊官殿の刀もて、搦替てたびねかし。彼一ト刀だに署代れば、其処にて信乃は恙なくとも、這奴許我へ赴きて、何事をかしいだすべき。龐忽の罪を糺されて、縛首刎られなん。相謀れてだに給はらば、おん身に濱路を妻せて、職祿副に譲らん』といはるゝに推辞かたくて、遂に密議に乗合船。件の刀を搦替しも、おん身を妻にせん為のみ。その事なくはいかにして、さる奸曲に與すべき。かくて此彼両刀を、搦替んとせしときに、信乃が刀の中心より、忽然として水氣霽り、夏なほ寒き焼刃の靈光、いとも得かたき宝に愛て、つら／＼視つゝ、熟思へば、前の管領、持氏朝臣の重宝に、村雨といふ宝刀あり。その刃、鞘を出れば、おのつからに水氣霽る。殺氣を含みて打振れば、刀尖より出る水、狭霧の如く散乱す、と傳聞るは是なるべし。さるを臺六莊官が、信乃にこれを與し、といふ事は甚不審し。信乃が親番作は、その父匠作共侶に、春王安王に傾し奉り、結城に箆城せしといへば、この刀は持氏より、岡公達に傳られしを、春王安王卒去の後、番作竊に携て、大塚に退隠し、彼人没して今はしも、信乃が偏るに疑ひなし。かくは得かたき名刀を、莊官つれが手に落さば、俗にいふ猫に黄金ならん、且彼夫婦が欲する所、われを愛してこの刀を、搦替させんとはあらず。この刀を畧せん為に、われを愛するおもゝちする状。甘言も憑みかたし。さは鄙言に、毒を食はゞ皿まで甜れ、といふは今宵の事にこそ、と思ひにければ信乃が刀を、わが刀室に納替つゝ、又わが刀は莊官の、刀室に納めつ工合よく、刃ばかりを三方替に、かえて且そのやうを見るに、莊官夫婦は約束の、唇もまだ乾め程に、陣代躰上宮六に、婚縁を結びつゝ、いく日もあらで、今宵の婿入、傳聞ては腹たゞしく、妬く悔しく、形なし。人を殺してわれも亦、死んと思ひ決めしが、いまだおん身の心をしらす。命に換るものゝなければ、わりなくおん身を將て走つ。憎しと思ふ人々に、恨をいはで怨を復す、志は致したり。幼稚馴染に羈されて、信乃に実情を盡すとも、流に随ふ落花の如し。渠いかにしてこゝろあらん。かへることなきもぞかし。再び試せし宝刀の奇特、土太郎等を撃しとき、野火の滅しは村雨の大刀より出る水氣によれり。華洛に上りて、この宝刀を、室町殿に獻らば、數百貫の主となる、立身疑ひなきも也。さるときはおん身をも、奥さまと唱させ、尋の人に冊せん。歎きをとゞめてこの山を、とく／＼と踰給はずや。肩れ給ふ坎、手を掖んか、いかにぞや」と身をよせて背を拊つ、手をとりつ、辞巧に慰めけり。